

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

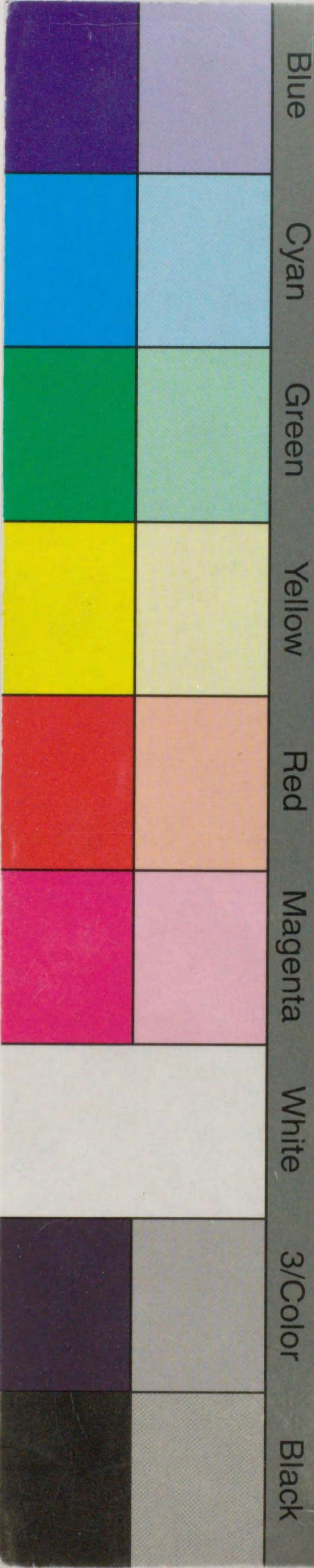
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



領 解 文

岡 部 宗 城

領
解
文

岡
部
宗
城

目次

引 三

本文講讀 四

引

わが家長昏の勤行に方軌がある。

あさ鯨堂に参拜して嘆佛偈を誦し正信偈六首引の和讃を諷し三經の一節をくりよみしておはると御文章を上げる。淨き毛箒を以て中尊さまのお身を掃ふてお佛飯を供へる、持佛にて論偈をあげて家内中が蓮如上人御一代聞書をくりよみする。

お夕事には正信偈三首引にて、お持佛にて論偈をよみ必ず一同領解文をとなふること三百六十五日の例時である、かくてお領解文の中に生れお領解の中に育ちたりといふも不可なきなり。

講讀全集發刊に際してその領解文を余に課せらる、幸慶何物かこれに加へんや。然るに實はあまりに親しきためと簡約なるためと甚深のものなるためとかたがたもつて遅々として筆すゝますまことに慚愧に堪へず、數度の寄稿督促をうけて止むを得ず旅中に隨筆領解文を成す、これを大方に示すものに非ず、喜びを共にせんとする青年諸君に寄せ併せて叱正を乞ふ。

昭和十年十二月六日

岡部宗城

本文講讃

モロ／＼ノ雜行雜修自力ノココロヲフリステテ、一心ニ阿彌陀如來我等ガ今度ノ一大事ノ後生御タスケサ
フラヘトタノミマウシテサフラフ。タノム一念ノトキ、往生一定御タスケ治定トゾンジ、コノウヘノ稱名
ハ、御恩報謝トゾンジヨロコビマウシ候。コノ御コトハリ聽聞マウシワケサフラフコト、御開山聖人御出
世ノ御恩次第相承ノ善知識ノアサカラザル御勸化ノ御恩ト、アリガタクゾンジ候。コノウヘハサダメオカ
セラルル御オキテ、一期ヲカギリマモリマウスベク候。

右此領解出言之文ハ信證院蓮如師ノ定メオカセラル、所ナリ、眞宗念佛ノ行者己ニ一念歸命ノ信心發
得セル領解ノ相狀ナリ。是故ニ古今一宗ノ道俗時々佛祖前ニシテコノ安心ヲ出言シ、自ラノ領解ノ謬
ナキコトヲ敬白スルナリ。然ルニ間其後生ノ一大事ヲ輕忽シ自ラタシカニ彌陀ヲタノミタル一念ノ領
解モナク、亦コノ領解文ヲモ記得セザル類アリ、アルヒハ記得シ出言シナガラ心口各異ニシテ慚愧セ
ザルモノアリ、甚悲歎スベキトコロナリ。コヒネガハクハ一宗ノ道俗、コノ出言ノゴトク一念歸命ノ
本源ヲアヤマラズ如實相應シテ速ニ一大事ノ往生ヲ遂ベキモノナリ。コノ故ニ今ヒメオキシ蓮師ノ眞
蹟ヲ模寫シ印刷シテ家ゴトニ授ケ、永ク淨土眞宗一味ノ正意ヲ得セシメント思フモノ也

天明七年丁未四月

釋文如識之

これが全文と奥書であります。奥書を読めば作者が本願寺第八世の宗主信證院蓮如上人であるといふことゝ、
これを全國門葉の家毎に頒布した文如上人の氣持がわかり、これを出言し諷誦するわけもおのづと知れる、問題
はかゝる敬白出言の形式が従前からあつたか否かであります。

淨土論に世尊我一心とあるを曇鸞大師は釋して天親菩薩自督之詞なりといはれてあります。

祖師親鸞聖人の弟子慶信房が自督を書して祖師聖人に伺つたことが末燈鈔に出てゐますし、蓮如上人御一代開
書にも實悟記にも西國の人何某が御前に安心を出言したことが記載されてゐます、これ等を領解出言の故實とし
てよからうと存じます。然らばそれは何のために出言するかといふことであります。

これには二つのこゝろがあります。

一つは自らの領解の誤謬なきことを敬白してその印可を善知識に請はんとするものであります、慶信房が祖師

聖人に伺つたのがそれでありませう。

一つには自らのためばかりでなく他に對して一味の領解に誘引せんがためであります。蓮如上人の御文章の中に廻心懺悔して諸人の耳にこれをきかしまるやうともあり、また廻心懺悔をきくてもげにもとおもひてなどあるものこれでありませう、この兩様の理由は二つが二つながら成り立つとおもふのであります。

□

文如上人の奥書に右此領解出言之文といふてこれを領解文とつねに略稱してゐませう。領は領受、解は解了でありまして、知識のおしへを領受し教への如く解了することでありませう、いはゞ信心の異名であります、若しそれ出典をいはゞ法華文句に舍利弗領解を釋して領其所聞、述其所解とあり、妙樂これを解して領謂外領佛語謂内受佛意といふところのものがそれでありませう。

□

領解文をまた改悔文といふものもありません、このときは改は變改悔は懺悔でありませう、たゞしき領解を得たるとき即ち從來の心得のあやまれるところの過ちをあらためてこれを悔ゆるのころであります、故に此名も差支ありません、たゞ然し改悔の名は既往のあやまちに對していふのでありませう、もろくの雜行雜修自力のころをふりすてといふところをにらみ、領解の名はいまうるところでありませう、一心に阿彌陀如來われ等が今度の一大事の後生おん助けさふらへとたのみまふしてさふらふといふところをにらんだのでありませう。

いづれにしても理實は闇去明來でありませう、日が出たら夜があけ、闇が去つたら明るくなるのであつたさきはないのであります。

□

この領解文は眞宗の綱格を最もはつきりと明確にしたものとして古來左の如き科段を切つて味はゞれてゐませう、もろくの雜行雜修自力のころをふりすて、一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御助け候へとたのみまうしてさふらふ——安心

たのむ一念のとき往生一定御助け治定と存じこのうへの稱名は御恩報謝と存じよろこびまうし候——報謝——

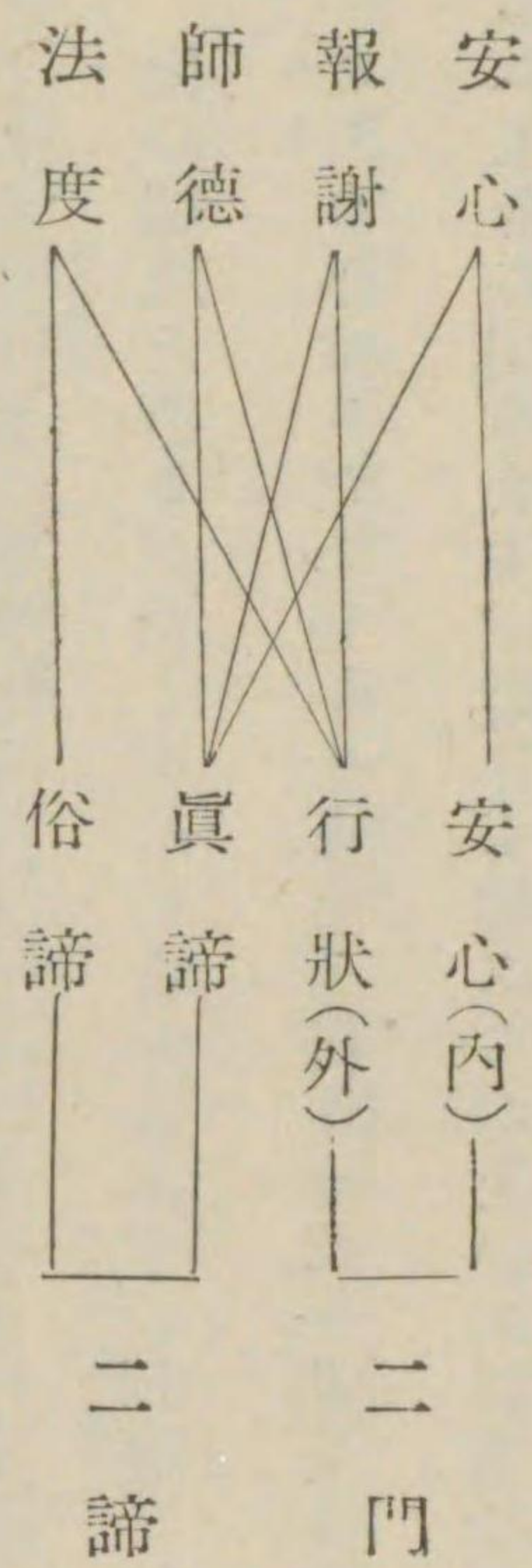
この御ことはり聽聞まうしわけさふらふこと御開山聖人御出世の御恩次第相承の善知識のあさからざる御勸

化の御恩とありがたくぞんじさふらふ——師徳

このうへはさだめおかせらるゝ御おきて一期をかぎりまもりまうすべく候——法度

といふ工合に切りませう、而して常にこのといふ言葉で句切つて味はつて來てゐるのであります、それでありませうから安心と報謝の句切れ目にたのむ一念のとき往生一定おんたすけ治定とぞんじといふ言葉は、承上起下であり結前生後になつてゐませう。

これを左に圖示して見ませう。



安心は三業ごうの中では心であり内であります。報謝師徳法度は身口二業に屬して行狀であり外であります、而して安心報謝師徳は真諦門しんたいもんであり法度のおきては俗諦門そくたいもんであります。従つて真諦門は超世間的であり俗諦門は世間的であります、これを車の兩輪、鳥の兩翼にたとへて一翼だけでは真宗教義をなさない、一翼を支ふだけでは真宗人とはまうさないのであります。

これをまた古人は趣味深い俳句で味はつてゐます、御參考に書き添へませう。

安心 外に眼はふらず雲井に揚雲雀

報謝 散るまでは香はうつろはぬ花柚哉

師徳 いかばかりお手間かゝりし菊の花

法度 花持ちし人からよける小路哉

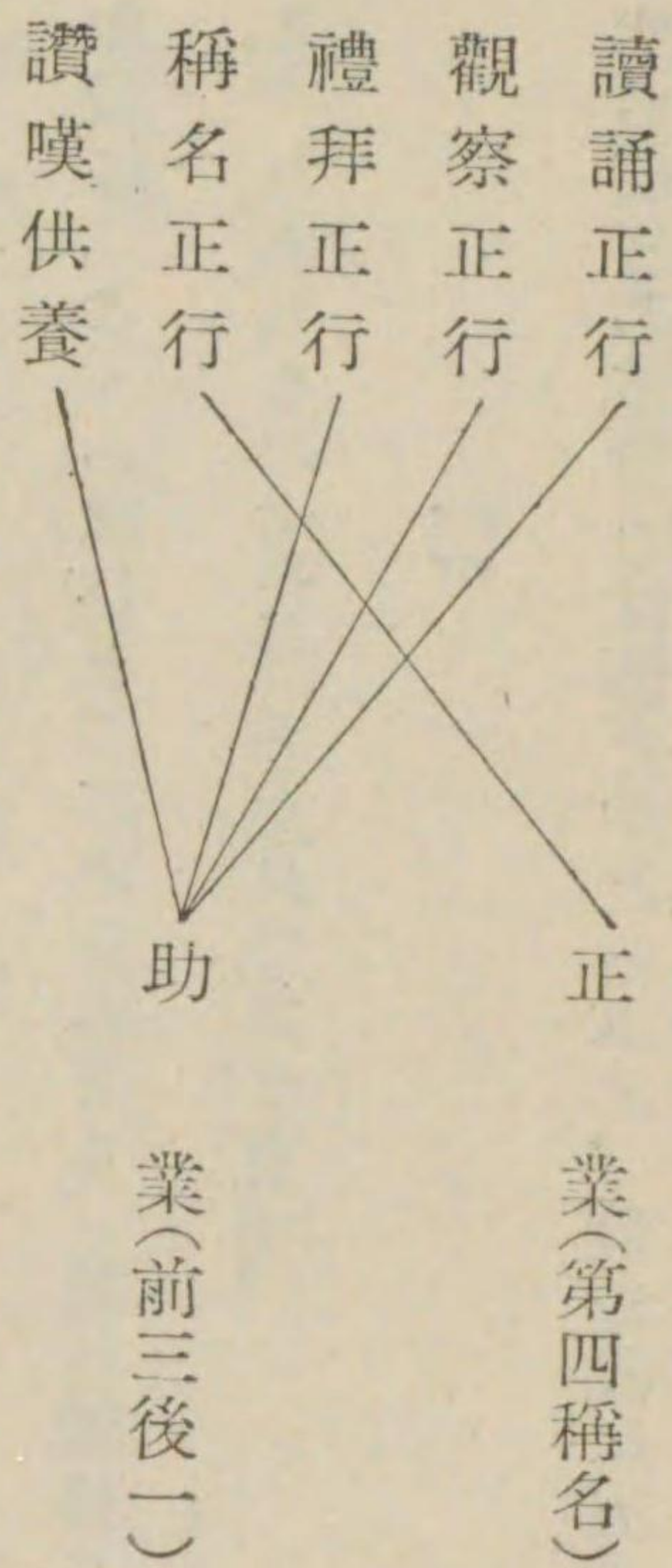
安心の一段先づ所捨と能取とあります、もろくの雑行雑修自力のこゝろをふりすてゝが所捨です。

もろくといふは非一の義といふて萬事の雑行であるからもろくといふたのでありませう、また一つには雑行雑修自力をひきくるめてもろくといふた邊もありませう。

雑行とは善導大師の散善義に教ゆるところの正雑しやうざつ二行對で正行に對して雑行といふのであります、正行といふのは彌陀一佛に就いての行でありますが雑行はこれに反して非彌陀行であります、いはゆる彌陀行以外の餘の功德善根のことごとくが雑行であります、けだしこれは人天菩薩等の解行げぎやう雑まじはるが故に雑行と名くるものでありませう。

和讃に「こゝろはひとつにあらねども、雑行雑修これにたり、淨土の外にあらぬをば、ひとへに雑行となづけたり」とあるものすなはちそれでありませう。

然らばその正行とは何ぞやといふに、散善義に五正行を教へて



といふてありまして、讀誦とは専ら淨土の三部經を讀誦すること、觀察とは専ら彌陀の淨土の依正二報の主伴莊嚴を思想し觀察すること、禮拜とは専ら彌陀を禮拜すること、稱名とは専ら彌陀の名號をとなふること、讀嘆供養とは専ら彌陀一佛を讀嘆し供養することなのであります。而してこの五正行の前三すなはち讀誦、觀察、禮拜と後一すなはち讀嘆供養を助業とし第四の稱名を正定業とするのであります、第四の稱名こそ正定業にして餘の前三後一はこの第四稱名の正業のためには助業なのであります。

□ 雜修とは專修に對することばであつて、源信和尚の往生要集にくわしく教ふるところであります。正信偈にも源信廣開一代教、偏歸安養勸一切、專雜執心判淺深、報化二土正辨立とあるものそれであります。すなはち前にいふた正定業であるところの第四の稱名と助業である前三後一と助正兼修するものを雜修とされたので、専ら彌陀の名號を稱する一行を專修としたのであります。和讚に專雜の得失を明かにして、「專修のひとをほむるには、千無一失とおしへたり、雜修のひとをきらふには、萬無一生とのべたまふ」とあります、稱名の一行にては不足とおもふて前三後一を兼ねならべて修するが故に雜修の名があるのであります、故にまた和讚に「助正ならべて修するをば、すなはち雜修となづけたり、一心をえざるひとなれば、佛恩報するこゝろなし」とあります、この助正兼修のを雜修と名くるほかまた和讚にかういふのがあります。

「佛號むねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも雜修となづけてぞ、千中無一ときらはるゝ」といふのであります。これは行は專一であるけれどもそののぞむところの現當にまたがりて其心名利と相應するところ雜修となづけらるゝ所以であります。功利的に名利を求むる心で以て現當にまたがつて純一ならざるが故であります。

□ かくて雜行も雜と云ひ、雜修も雜といふ、而して修も行も通ずる言葉だからおなじやうであります但其心は大に異つてゐるのであります。

雜行は彌陀一行に對する餘他一切の非彌陀行を指してゐるので、萬善萬行をいふのであります、従つてこれ行體に就くのでありますから、正に對する雜であつて專に對してゐるのではないのであります。

雜修の名は修相に就くのでありまして雜へ修するこゝろで兼行であり專に對していふのであつて、正に對する

のではないのであります。

□

いまこの雑行も雑修も皆行でありまして、能修のよくつとむるころをさして自力といふのであります。然し乍らこの雑行雑修の能修のころを自力といふばかりでなく、雑行をすゝて正行に歸し助業をすゝて正業をとり尙且つ專修でありながら、その中自力他力ありて二十願の念佛をばげむならばこれは自力專修の念佛であります。

かゝるが故に雑行も雑修も自力だから雑行雑修自力とならば、また雑行雑修のほかに自力念佛あるが故に雑行雑修自力とかさねたと見てよいのであります。

□

いまこれをふりすてゝといふのであります。ふりすてゝとは放擲して顧みないことであります、法然上人の選擇集ちやくしゅうに捨の言は歸に對すといふてあります。なげうちて或はさしをきて或は目をかけずしてといふて未練のない、ふりかへつても見ないことであります。何故に未練がないかといふにとるものを取り歸するところが出来れば未練も何もなくなつてふりかへつて見る必要がなくなるのであります、たのみまうしてさふらふとふりすてゝとは同時でありまして、前後はありませぬ。闇が去れば明かるくなり、明かりがくれば闇は去ります、他力に歸してたのまれたのが自力がすたつたのであり、自力がすたつたのが他力に歸したからであります、散善義に佛遺捨者即捨佛遣行者即行是名隨順佛願といふものそれでありまして、たゞ此場合のふりすててといふては文字上の次第時間の次第では決してありません。

□

所捨のころを前の如しとしてさらに能取の方を検討して見ませう。かくて淨土眞宗一家の廢立が明かにされるわけであります。

先づ初めに一心と標し後にたのむと結んであります、この一心にたのむといふ相を具さにして阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生おんたすけさふらへといふてあるところ、淨土論の初めに我一心と標し歸命盡十方無碍光如來といふと少しもかわりませぬ、然れば一心といふこと、たすけたまへといふこと、たのむといふこと、唯一無疑心に名くるところのものであります。

□

然らば一心といふはいかにといふに、一は無二に名くるのでありまして、尊號眞像銘文に即ち教主世尊のみことをふたごゝろなく疑なしとなりとあるものそれでありまして。即ち專一にして二心なく疑なき謂れでありましてこれを疑蓋無雜とまうすのであります、これを所歸の佛に望むれば一向といふ、即ち阿彌陀佛に就て二佛をなら

べざるこゝろなりと御文章にいふてあります、それをまた散善義には二行をならべざるを一向といふてゐます、一心一向少別ありと雖もいまは一心一向を同じくする心持でありまして、蓮如上人の五帖御文章いづれはみな此義であります。

御一代開書に彌陀をたのめば如來の佛心とひとつになしたまふが故に一心といふことがありますが、これは佛凡一體の義によりて一の字の轉釋をしたものでいまはあたりませぬ。

□

阿彌陀如來われらが今度の一大事の後生御たすけさふらへとたのみまふしてさふらふといふのは一心を述成してそれをくわしくしたものであります、阿彌陀如來とは所歸しよきの佛體であります——彌陀の形相形像ではありません。われ等が今度の一大事の後生といふのは自らの所期であつて、この所期をもつて所歸の佛體に投託することでありす。すなはちこれ一心の信相を示したものであります。

われ等が今度の一大事の後生といふのはわれ等は自らを指すので等は語例にすぎませぬ、無論等内等です、然し大衆同音に出言するとき等は等外のやうにもとれますが、それとて私人の呼稱を語例にいふのです、今度とは順次の生を指します、一大事とは法華に出づるところの一大事因縁からであります、一は二三に對し其事の重大性を一大事といふたのであります。

迷悟浮沈ひとへに信不信のよつてわかるゝところでありまして、信すれば解脱し信ぜざれば流轉りうてんするのでありますから、一大事であります、後生は後生で今世でない來世後生を指してゐます。

御助け候へとたのみ申して候といふのは、御助け候へは歸命を和述したものでありまして、蓮如上人の御文章に「それ歸命といふはすなはち助けたまへとまうすこゝろなり」とあります。

たまへ、候へ、ましませといふ御文章いづれも同義と心得てよいのでありまして、是れたすけたまふ佛願力すなはち本願招喚ちよくめいの勅命ちよくめいに助けたまへと歸依歸順するのであります。祖師親鸞聖人の行卷に歸命釋及び起信論義記の歸是敬順義命謂諸佛教命とあります、固もとより通別併せ考へねばならぬのであります。

善導大師の散善義に決定深信彼阿彌陀佛四十八願攝受衆生無疑無慮乘彼願力定得往生とある佛の攝受衆生の大悲心が衆生の心中に徹到するを乘彼願力といふので、これおんたすけ候へといふところのものであります、即ち無疑無慮の信にしてさらに願求心くわんぐしんを運ぶのではないのであります。またたのむとは信の和訓にして、信といふはふかく人のことばをたのみて疑はざるなりと唯信鈔にはいふてあります、萬葉では不信と書いてたのまずと讀んでゐるところがあります、信ずるといふことはたのむことであります。眞實院大瀛師の横超直道金剛鐸にはたのむといふは許可を義とすといふてゐる、信は願より生ずれば念佛成佛じねん自然なりであります、彌陀の本願と云ひ誓願不思議といふ、その願に對する許可でありまかせるであり許すであり、そのまゝにすなほにうけるのであります。

す。

歸命と信ずるといふことは固より一體一義であります故に、御助け候へとたのむとは全く無疑の一心と心得てよいのであります。

然らば御助け候へとたのむの詞は何處から初まつたかといふに、後世物語にもないが蓮如上人御一代開書に「聖人の御流はたのむ一念のところ肝要なり、然ればたのむといふことをば代々あそばしおかれ候へども、委しく何とたのめといふことを知らざりき、然れば前々住上人の御代に御文を作り候ふて、雜行をすて、後生助けたまへと一心に彌陀をたのめと明かに知らせられ候、然れば御再興の上人にて在すものなり」とあり、又念持の義を始唱した故に中興であるとも蓮如上人遺徳記に出てゐるところを見ると、蓮如上人が濫觴であると見ねばならず、蓮如上人の老婆親切を仰がねばなりません。

まうしてさふらふといふのは、口陳と見るべきでない、崇敬であります。奉宣諸説をまうしのぶと書記に出てゐる、ては而で過去を示す、御文章にしば／＼たのみたてまつるの語があります、いづれはおなじころなのであります。

□

結前生後のたのむ一念のときより治定とぞんじまでは一心にたのむといふ安心を承けて即得往生の現益を示さ

れ、次下の報謝を起してするのであります、實に唯信正因と稱名報恩との水際を立てゝくだされたたふとい名工苦心の跡であります。従つて一念といふは本願成就文——大無量壽經下卷最初——の一念でありまして、これに二釋あります。一つは信體に約して、信卷に信心無二心故曰一念是名一心といふものがそれであります。二つには時刻に約するもので、同じく信卷に一念者顯信樂開發時刻之極促といふものそれであります。一念とは六十六刹那で、刹那とは薄紙と薄紙との間を針のとほるほどの時刻を通過にまうして居ります、いま時に約すといふも此實時ではありませぬ、信受本願と即得往生とは更に隔てがないので、信心さだまるとき往生さだまるのであります。故にときといはずに一念の立ちどころとまうす場合が屢々です、執持鈔に「平常の時善知識のことばのしに歸命の一念發得せばその時を娑婆のをはり臨終とおもふべし」と。味深きことばであります。

□

往生一定といふのは、これも本願成就文の聞信一念即得往生の義によりて本願他力の妙益を示したものであります。往生といふのは此穢土を去りて彼の淨土に生るゝをいふのであります。

然しそのとりあつかひが己今當の三時にあつかはれてゐます。若不生者不取正覺の法藏菩薩が其願其行成就して、正覺をとり南無阿彌陀佛と成つたときすでにわれ等の往生が出来上がつたのであります。安心決定鈔に南無阿彌陀佛といふ名を聞かばあゝはやわが往生は成就しにけりとおもふべしとあるもの過去の往生であります。

然し過去の往生といふものはたゞ彌陀の手元に出来上がったのでありましたが、それが聞信一念にわが身のものになるので、それが前にまうした執持鈔のそのときを娑婆のをはり臨終とおもふべしといふ不體失往生です、これを名けて現益とします。

けれどもそれでも罪も起れば障りも除けませぬ。歎異鈔に娑婆の縁つきてちからなくして終はるとき彼土へはまへるべきなりといふもの未來の往生といふべきであります。往生とは世間では行き詰つたことに誤り名付けてゐますが決して行き詰つたものでなくして、行き詰つた世界を切り開いて往くところが往生であります。

此生や實に三界有漏の生に非ずして生即無生の涅槃界にいたるが故に、永く六趣四生の因果を泯亡するのであります。それでありますから往生即成佛であります。

いまこの領解文の往生一定御助け治定とあるは心命終でありまして、執持鈔のときのころもちなのであります。往生といふことゝ成佛といふことで今家他家のわかるゝところでありますが、今家の所談はつねに略門といふ往生即成佛の難思議往生なのであります。通途廣門の所談なれば往生は初門で成佛は終門です。つねに略門でまうしますから蓮如上人の御文章では極樂にまゐりてうつくしきほとけとはなるべきなりであります。

往生一定と云ひ御助け治定といふ、往生一定とは入正定聚であり、御助け治定とは攝取不捨の利益に入れしめられたことでもあります。所期の果に望めては往生一定であり、所歸の佛に望めば御助け一定であります。然し結極いづれも一つでありまして阿彌陀といふ三字をばおさめたすけすくふとよむと蓮如上人の御文章に出てゐます、また正像末和讀の冠頭には攝取不捨の利益ゆる等正覺にいたるなりとあります。

以上をもつて安心段の概要をのべさして頂きました。このうへの稱名は御恩報謝とぞんじよろこびまうしさふらふとあるところを報謝の段として味はひさして頂きます。即ち此上の稱名とは前段安心決得の以後の稱名といふことでありまして、蓮如上人の御文章に信心發得以後の念佛をば自身往生の業とはおもふべからずといふころであり、口傳鈔の信のうへの稱名の事といふたのを相承せられたのであります。

稱名報恩のことその本は善導大師の禮讚に、相續念報彼佛恩とあり、親鸞聖人の正信偈には唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩とあります、その源頭はもとより本願に乃至十念とありますものそれで乃至といふのは上下久近一多を兼る言葉であります、一念多念證文及唯信鈔文意などおなじことではありますが、其上下をわかつて下至一念は信心決定のすがた上盡一形は佛恩報盡の多念の念佛であると決判し、蓮如上人もつねにこれをうけて御文章にもこれをねんごろにせられました。行の多念は信一念より流れ出づるものなれば命延ぶれば自然と多念に及ぶ道理とあります。往生は一念の即時にさだまる、故に正因全く信心なり、信心のほか何の不足もないのであります、これが乃至であります、この乃至をとほして出た十念の稱名を何を以て往因に擬するの要あらんやであります。

す。稱名報恩の義自ら分明です。

□

然らば稱名が何を以ての故に報恩になるかといふのでありますが、稱名には二つの徳があります、上は佛徳を歎ずることもちになります。尊號眞像銘文に稱佛六字即歎佛の釋があるのがそれでありまして下は衆生を化することもちがあります。蓮如上人御一代問書に尼入道のよろこぶをきゝて人が信をとるといふところのものがそれであり、この自行化他じぎやうけたの二つが報恩になるのであります。善導大師の自信教人信難中轉更難大悲傳普化眞成報佛恩といふもの故ある哉であります。

□

さきに安心をのぶるとき五正行すなはち讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚歎といふのでありますが、これみな報恩に擬して差支ある筈はないのでありませう。然るに第四の稱名を報謝として何故に他をいぬのでありませうかといふのに、稱名のみをあぐるのは一には難易について易をとり、一つには本末について本をとつたのであります。稱名は本行であつて他は末行であります、本願の所誓が乃至十念の稱名であるからであります。

殊にその難易をいはず時處諸縁をきらはず行住坐臥を簡ばず、長時不退に修し易いのであります。善導大師も願信和尚も法然上人も親鸞聖人も而して蓮如上人の御文章にも此故なればこそ稱名念佛をすゝめられました。此

一二つから考へて報恩講式文の不如念名願歸彼本懷といはれたものでありませう。

□

かくて師徳しとくを述べねばならなくなりました。實をいふと師教すいしやくに隨順し師徳を讚仰することもおきての法度を守るのも畢竟はみな報謝行なのであります。このおんことはりといふ言葉は信因稱報の法門をさすのでこの法門から出た師徳であり法度であるといふことであります、従つてまた安心報謝も法度も師教に隨順するほかはないのであります。

親鸞聖人は眞佛顯智はわが手なりわが足なりといはれたと高田傳ではまうしてゐます、その手足のやうにおもはれた顯智上人がある年京へまゐりました、かねていつ頃上洛いたしますといふたよりを上げておいたのでありますでしたがそのたよりの時日より三四日もおくれて上洛いたされたのであります、親鸞聖人はたいさうお待ち兼ねになつてさきのたよりよりはたいへんおくれたでないか、途中に何事かあつたかとのおたづねに恐縮して、實は途中の旅宿でたべた菌にあてられましたとまうしあげたとき、だから菌はたべないものだとの仰せに顯智上人は一生菌を絶つて爾來決してたべなかつたさうであります、これもまたある年同様のことがあつて親鸞聖人のおたづねに顯智上人は實は年はとるものでありませぬ、聊かの所勞で人に船をすゝめられ船に乗りましたら暈よつてひどい目に逢ひましたとまうしあげたとき、だから船には乗らぬものよとの仰せに生涯いかなる寄り道をまわつて

も船には決して乗られなかつたさうであります。師教に隨順せらるゝことかくの如くありたいものであります、いま領解文で師徳をこのおんことはり聴聞まうしわけ候事といふてゐます。聴聞ちようもんとは四教儀集註に聲入耳謂聞耳待聲謂聽とあります、これ通途の所説をまうしたのであります。が今家別途では聴聞といふことは如實の聞であつてそれは信と全く同じであります、親鸞聖人は大無量壽經の諸有衆生聞其名號信心歡喜とあり其佛本願力聞名欲往生とある聞の字を釋して、信卷に然經言聞者衆生聞佛願生起本末無有疑心是曰聞也といふて居られます、また一念多念證文にはきくといふは本願をきゝてうたがふこゝろなきを聞といふなりとあり、またきくといふは信心をあらはす御みのりなりともあります。

すべて信のうへに見ともいはず、念ともいはずに聞もといふてくださるところに何ともまうされない味がありません、諸佛の讚嘆口業に應ずるが故で聞であります、たゞに第十七願の諸佛稱名ばかりでない重誓の願意に従ふから聞であります、二尊の招喚發遣に應ずるから聞であります、生起本末に應ずるのも説に對する聞であります、彌陀の本願の願體は稱名願體でなく至心信樂欲生の三信であり覺りの體は名號であります、かるがゆゑに聞であります、上に望めば何を聞くか信因稱報のいはれであり下に望めば誰れに聞くかの御開山善知識にきくことゝなるのであります。

御開山みかいたまとは黒谷法然上人の正統をつたへ大谷の一流を開闢したまふに名くるのであります。佛祖統記に建壽聖院請佛開山といふもの開山の熟字であります、いまわが開山は一たび世をのがれて叡岳の高きにのぼり修學研道せられました、その高き叡岳がかへつて名利の巷でした、故に隱遁の志にひかれて山から町にくだられました、かくて町の佛法、村の宗旨をひらかれましたからその通途の名をかりて開山とし、敬つて御開山とまうしてゐます。大師は弘法にうばはれ、祖師は日蓮にうばはれ、開山は親鸞にうばはれたと世間でまうしてゐますが趣きふかい話であります。

御出世とは出現世間であります、親鸞聖人がわれ等と同じく人間としてわれ等と同じく日本人として生れてくだつたことに、私達は感激と尊敬と仕合はせと感ずるものであります。恩とは恩惠恩徳の義であります、眞諦門よりいはゞ七祖相傳の法義を大成して信心爲本の宗風を開顯し、俗諦門よりいはゞ在家示同の宗風を顯揚して王法爲本の教を布きたまふ、これみな御開山親鸞聖人の恩惠恩徳であります。「如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし、師主知識の恩徳も、ほねをくだきても謝すべし」と和讃にあるもの謂れありといふべしであります。聖人といふは崇敬の言葉でありまして、論註には聖聖智也如法相而知故稱爲正智といふてあり、唯識述記には聖者正也與理相應於事無壅曰之爲聖とあります、わが親鸞聖人は眞實と權化とを分明にし是非を明了にせられました、捨家棄欲常修梵行も聖ではあらう、然しわが聖人は怯劣の凡夫であり優婆塞うぱさいでもあつたが心は大圓鏡

智の大聖でありました、たゞの凡人でない、偉大なる凡人であらせられました、聖中の聖であります。

善知識には教授同行外護の三種がありますがいまは教授の知識であります。二卷抄下にいふ眞の知識であります、眞は假に對して弘願眞實を弘めたまふが故に眞の善知識といふのであります、あさからざる御恩とは祖師親鸞聖人以來血脈法脈次第相承して、其傳承したまふ法義毫末の誤りなく、よく門葉を化導したまふ徳をまうしたのであります。これ實にあさからざるものがあるといふ謂であります。

御勸化とは勸進勸諭であり化は開化化轉であります、すなはち雜行雜修自力のころをふりすて、開化化轉し他力佛智の本願に勸進勸諭して歸入投託せしめらるゝ御恩をありがたしとまうされたのであります、ありがたくは謝恩の方言でありまた希有の義も通じ最勝の意味にもとれます。

報恩講式に眞宗興行の徳、本願相應の徳、滅後利益の徳を歎じ實にまた歎徳文をつくりて尙更に祖徳を顯揚してをられます。

祖師親鸞聖人は和讃に、三朝淨土の大師等、哀愍攝受したまひて、眞實信心すゝめしめ、定聚のくらゐにいれしめよ」と讃嘆せられ、蓮如上人は次第相承の善知識といふばかりでなく御文章には、師匠坊主の在所へもあゆ

結論を急ぎませう。

最後は法度の掟であります、

此上はさだめおかせらるゝおんおきて、一期をかぎり守り可申候とあります。此上とは眞諦安心を心得ての上は俗諦行儀の守るべきをさとし、それを誓言せしめらるゝの思召であります。

掟の出據は本願の唯除五逆誹謗正法であります、これを三ヶ條六ヶ條八ヶ條の御文章として蓮如上人は嚴誠されたのであります。勿論われ等の如來南無阿彌陀佛は裁く如來ではましますさぬのであります、裁くほとけさまでなくて、すべてを許したまふほとけであらせられます、許すほとけさまなればこそ泣いてくださるほとけなのであります。何事も許す如來の御眼に血の涙の滴つてゐることが知られたら慎しまねばならず、反省せねばならずわが身も泣かねばならずわが身の行ひも直してかゝるところの氣持にならねばならぬのであります、眞宗の俗諦門といふもの實は眞諦流出なのであります、寧ろ眞俗一致なのであります。

唯除五逆誹謗正法をあるかないかに取扱つてはならない、信前のものには信機を生ぜしめ、信後の人には慚愧

を生ぜしむるところのものであります。善導大師は已曾業未曾業としてその用意と工夫とを示されました、通途の深信因果とその趣きを異にしてもるませうが、攝取にもせよ抑止にもせよ此大切なる八字を本願の御文ごもんから見落してはならないのであります。

□

此上はさだめおかせらるゝ御掟一期をかぎりといふ期は限であり時限でありまして、命いのちのあらんかぎりといふのであります。守るといふは持ちて失はざることであり、一生涯もちて失ひませぬとのことでもあります。

然も眞諦安心報謝師徳ともに師教に隨順するのに、俗諦行儀も亦従つて隨順すべきであるといふ反覆の意趣あることをも拜察し得るのであります。

□

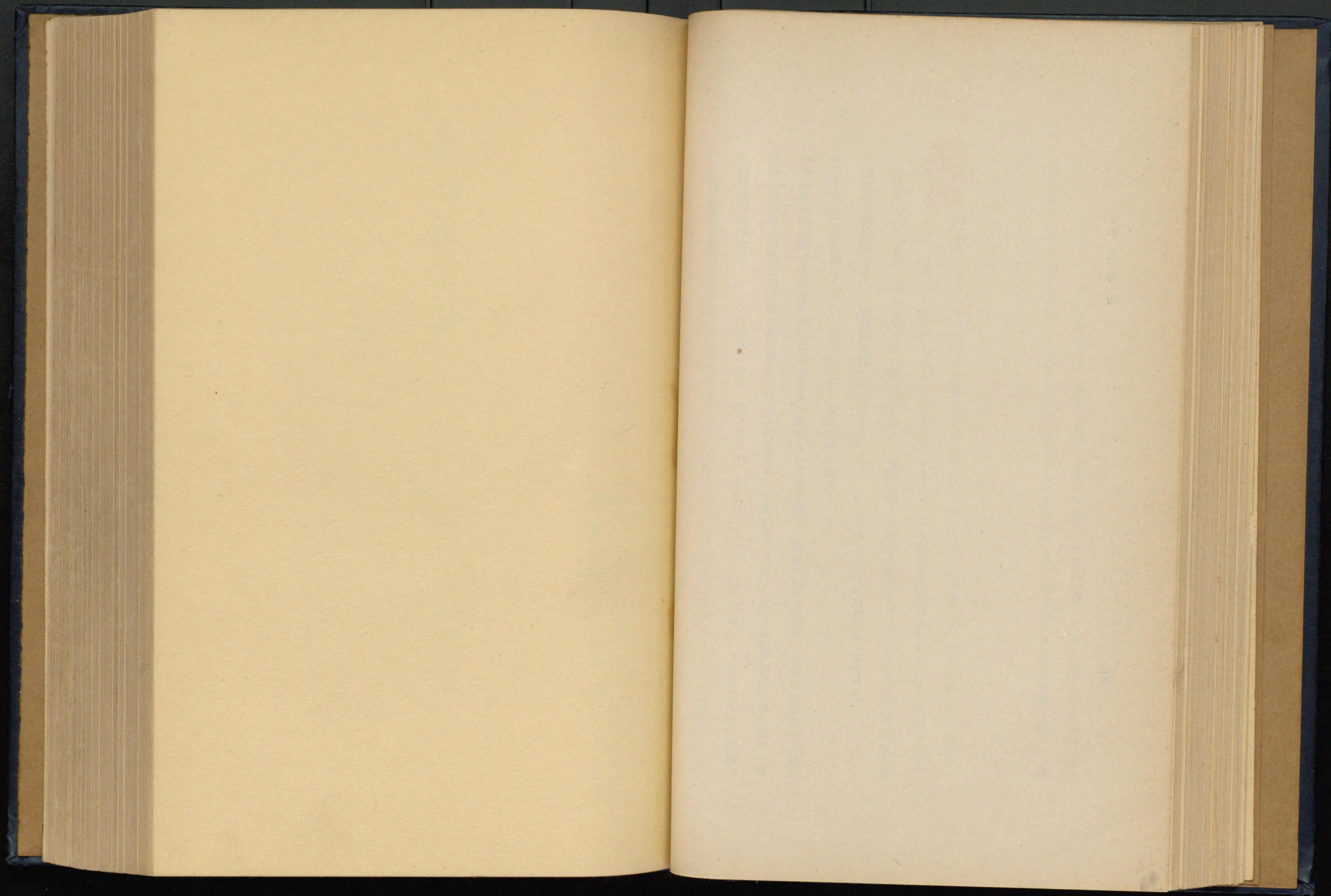
本願の唯除五逆の文は攝取抑止ありとするも然しながらその同じく大經の五惡段には、其有至心願生安樂國者可得知慧明達功德殊勝勿得隨心所欲虧負經戒（五善五惡）とあるに至つてはいよゝ／＼出據あきらかなものだといはねばなりません。

論註に曇鸞大師は若無諸佛菩薩說世間出世間善導教化衆生者豈知有仁義禮智信耶とあります、本願の文と云ひ五惡段の文と云ひ、教誡なくして何ぞ仁義禮智信がわかりませう。本願を信樂するものは須らく仁義を守り王法わうぽうを忽こた諸にするなといふのであります。

□

破邪顯正鈔に曰はく「この條佛法王法は一雙の法なり、とりのふたつのつばさの如し、くるまのふたつの輪の如し、ひとつもかけては不可なり。かるがゆゑに佛法をもつて正法をまもり、王法をもつて佛法をあがむ——世々にかうふりし國王の恩よりは、このところの皇恩ことにおもし——總じては公家關東おんけの恩化おんげなりと信じ、別して領主地頭ちちうの恩知なりとする、公私につけて更に違背の義なし」と。

私はこの御言葉をもつて此講讚の軸といたします。合掌。（昭和十年十二月六日備後三原の客舎にて）



聖典講讀全集第十三回配本・昭和十年十二月十日
印刷・昭和十年十二月廿七日發行・編輯者宇野圓空・
發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎
印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中未吉・
發行所小山書店・販賣所所有宇野圓空及小山久二郎